

登山月報

第66回山口国体報告……………	1
2011世界ユース選手権……………	2
第2回山岳指導員養成講習会(千葉)	5
無雪期レスキュー講習会(西部地区)	6
平成23年度臨時理事会報告……………	7
第35回Mountain World……………	9
JMA、寄贈図書、編集後記……………	11

第66回国民体育大会おいでませ! 山口国体山岳競技、千葉3連覇の快挙

第66回国民体育大会おいでませ！山口国体山岳競技会は、去る10月2日～4日にかけて山口県セミナーパークを会場に開催されました。山口国体は、リード、ボルダリングの2種目による開催となって4回目の大会となりました。リード競技は、2009年に行われたアジアユース選手権で使用されたこともある国内でも屈指の常設壁であり、現在のクライミング競技選手の技術水準に 대응するものでした。またボルダリング競技は、体育館内の仮設壁で実施されましたが、地元の方々のご尽力のおかげで、レンタルの空調設備を入れて頂き、快適な競技環境を作って頂きました。

今年は、リード競技が屋外開催であり、天候が心配されましたが、大会中はさわやかな好天続きとなり、全競技日程をほぼ予定通りに実施することができました。屋外施設でもありアイソレーションなどについては、テントによる仮設で選手の方には必ずしも十分に快適な環境とは言い切れない点もあったかもしれませんが、開催県の尽力により可能な限りのものを提供できたのではないかと思います。また、地元の幼稚園児に選手のエスコートをしたり、大勢の地元の方々が連日競技会場を訪れて下さり、大変熱心に選手を応援して頂きました。



ボルダリング競技会場

選手のパフォーマンスも素晴らしく、今年8月にオーストリア・イムストで行われた世界ユース選手権男子ユースBで2位になった千葉県少年男子代表のスーパー中学生島谷尚季選手や、同大会女子ユースAで2位となった地元山口県少年女子の小田桃花選手をはじめ、日本を代表する選手が数多く出場したため、非常にハイレベルな争いとなり会場が大変盛り上がりしました。



リード競技会場

また、一昨年の新潟国体から中学3年生が参加できる大会となり、今年も少年男子に6名、少年女子に11名の中学3年生が出場し、リード競技決勝に少年男子が3名、少年女子が6名残り、ボルダリング競技決勝にも少年男子が2名、少年女子が5名残りました。特に少年男子千葉県の島谷選手は、今回の決勝の個人順位でL競技1位、B競技4位と高校生の強豪選手に混じって大活躍を見せたのが印象的でした。中学3年生の決勝進出者は約3割を占め、今後さらに競技年齢の低年齢化が加速するのではないかと思います。

今年も会場内の速報板に1チームの競技が終了したらすぐに会場内のプロジェクターや大型モニターで競技が終わったチームの仮成績を発表し、さらに

リアルタイムで1位から8位までのチーム順位もわかるようにしました。途中から観戦した方にも現在の順位がわかりやすくとても好評でした。さらに、平成20年大分国体から日山協公認資格を持ったルートセッターやクライミング審判員、競技運営員がルートセットや審判、競技役員等をするようになり、今大会でもジャッジの結果に対するクレームはかなり減少したと思われます。

男女総合成績(天皇杯)は、千葉県が全種別全種目決勝進出を果たし、今年も圧倒的な強さで2位の山口県に18点差をつけ、3年連続の男女総合優勝を果たしました。同一県の3連覇は国体山岳競技史上初となる快挙です。特に少年男子千葉県の船橋東高1年の村井隆一選手とさつきが丘中3年の島谷尚季選手のチームが、リード競技、ボルダリング競技ともに制し、千葉県勢として2年連続の2冠を達成したことが千葉県の天皇杯1位獲得の原動力となりました。また国体常連の成年男子千葉県の伊東秀和

選手と渡辺数馬選手のリード競技1位も優勝に花を添えました。2位には開催県の山口県が入りました。特に山口県少年女子は、防府高3年の小田桃花選手と新南陽高3年の山縣茜選手を擁し、リード競技では山口県勢として大会3連覇、ボルダリング競技も大会4連覇という偉業を成し遂げました。また、特筆すべきは、後催県である岐阜県が4位、東京都が7位、長崎県が3位とそれぞれ天皇杯入賞を果たしており、平成27年に国体を控えた和歌山県も少年男子がボルダリング競技で3位に入賞するなど着々と強化が進んでいることが伺えました。今後の活躍が期待されます。

女子総合成績(皇后杯)は、地元山口県がスーパーエース小田桃花選手を中心に総合力で上回り、2位の千葉県に9点差をつけて見事に優勝を果たしました。なお、大会に関する詳しい結果は、日山協のHPでご覧ください。

(競技委員長・高山雅夫)

2011 世界ユース選手権 全員セミファイナルへ進出!

〈銀2、銅1のメダル獲得〉

「もしクライミングが2020年オリンピックの正式種目になった場合、今回のワールド・ユース参加者の中から、最初のオリンピックメダリストが誕生する可能性もあるのです。みなさんの健闘を期待します!」という開会式の挨拶で2011年のIFSCワールド・ユースは開幕した。

2020年の影響なのかは定かではないが、オーストリア・イムストで8月25日~28日に行われたIFSCワールド・ユースは明らかにこれまでとはその趣が異なっていた。

参加国が48と最大! 選手数は650名超。南アフリカやメキシコなど中南米諸国、さらには今までは日本と韓国しか見かけなかったアジアからも、中国やタイ、シンガポールなどからの参加もあり、明らかに競技の広がりが感じられた。主催者によると、「参加を促す特別なプロモーションなどは特になにもしていないのだが、結果として予想を超える参加者数になった」ということだった。

壁は2010年に完成した、極めて巨大な屋外壁。予選1日目などは同時に7本のルートで競技可能な大きさである。基部から壁の最上部までからは約30mの長さはあるのではという規模だが、予選では壁の中間部に終了点が設けられている。

開会式の挨拶に象徴されるように、会場には今まで以上に、ユース各世代の世界チャンピオンを決める大会であるという緊張感が漂っていた。

実際、過去数年のワールド・ユースに比べ明らかにルートは難しめ、予選1日目などは完登が予選通過ラインだった。ここ最近に比べ明らかにルート・グレードは上がり、クラスにもよるが完登者はなかなか出てこない。

日本ユースチームは、ワールド・ユース初出場のユースB女子に緊張が見られたが、ほとんどの選手が良い登りで初日を終わることが出来た。また今回よりコーチとして帯同した木村による、フラッシュであるということを最大限生かした的確なアドバイスも選手の到達高度を押し上げていたように感じた。



日本選手団

2日目は初日に引き続き予選フラッシュ。ルート・グレードはどのクラスも初日より若干高くなった感じだろうか？

ちなみにクラスによっては90名近い参加者のいるクラスもあり、待ち時間も、遅いスタート・オーダーだと非常に長い。その間、猛暑の屋外で集中力を保つのも大変である。予選の2日間に関しては、気温は35度近く、日本に比べ湿気は少ないものの、直射日光の下には居れたものではない、しかし壁の設計は上手く出来ており、大体午後3時半くらいまでは、壁には太陽の光が当たらない向き、ルートは日陰になるように設計されていた。

予選の結果は、なんと全員通過!! この規模の選手団で参加者全員が予選を通過したのは初めてではないだろうか？

大会3日目の天候は雨、気温は信じられないほど低く、街中の気温計は6度を指していた！会場には風もあったため、体感気温はそれ以下。壁では雨が当たるルートを避けるため、急遽終了点を2・3手下げる作業がセッターチームにより行われている。観客・関係者は、幅40mはあろうかという、丘の上の巨大テントに入り雨を避けて進行を待つ。結局、午後決勝がはじまる時刻には、天候が回復するという判断で、冷たい雨の中、各クラスのセミファイナルが予定より1時間遅れでスタート。チームスタッフにはあまりの寒さにダウンを着用するものもいるくらい。

寒さのせい、セミファイナルの緊張感のせい、オンサイトのせい、ぎこちない動きの選手も目立ってくる。現実には非常に厳しく、女子ユースAの小田と、男子ユースBは、島谷、是永、蔭谷の3名以外は決勝に残れなかった。

特に今年がユース最後となる男子Jr.の新田、羽鎌田、樋口、の3名は予選で好順位をキープしていただけに非常に残念だった。今年こそはと誰も



会場風景

が思っていたと思うが、準決勝は仲良く同順位となり、予選順位へのカウントバックで14、15、16の順位で決勝に進むことはできなかった。壁の途中のヴォリュームの処理で動揺してしまったのだという。3名とも、登りのスタイルが異なることから、リードルートの中での大きなヴォリュームの処理は日本ユースにとっての弱点なのかもしれない。

セミファイナルが終わる頃には予報通り雨が小ぶりになってきた。それでも壁の前の雨ざらしの中、仕事をしていた木村・安井の両名は完全に身体が冷え切ってしまったという。アイソでアップを見ていた西谷は、1人で16名のセミファイナル進出者(チーム全員)を管理しなくてはならず手が回らなかった部分もあったという。この辺りのチームスタッフ体制の強化は次回以降の課題かもしれない。

決勝は夕方から予定通りのスケジュールで行われた。ユースB男子は8名中、3名が日本人でいやおうなく期待が高まる。実際ユースBで会場を最も沸かせたのは、是永であった。MCからも「この大会で最も人気の高い選手がいよいよ登場します!!」などのアナウンスに笑顔で登場し、登り終わった後も、そのまま会場マイクでインタビューされるほどの人気ぶり。実際、彼の小さな体にも関わらず、躊躇しないで登る姿勢は多くの観客を味方につけていたようだ。

島谷は、やや保持力だけで登っている感もあるが非常に安定した登りで、終了点まで迫る勢いに見えたが、ループの抜けぐちを越えたあたりであっさりと落ちてしまった。

ユースB男子優勝はオーストリアに僅差で持っていかれた。2位は島谷、3位は是永、6位に蔭谷が滑り込む。



是永選手(手前)

ユースA女子では小田がループを抜け出して終了点に迫ったが、タイムアウトで、余力を残しながらの2位と、きわめて残念な結果。以前から強豪国に比べ、日本ユース選手は全般にスピードが無く、良く言えば丁寧なのだが、悪く言えばゆっくりしすぎ、大舞台の決勝でのタイムアウトはやはり残念。昨年のエジンバラでも感じたが、ちょっとした何か欠けるだけで金メダルというのは手をすり抜けていってしまうのかも知れない。

ちなみに1分コールの廃止の影響か、アンジェラの影響か、時計会社スポンサーなのか、腕時計をつけている選手がちらほら見受けられるようになっている。ユースA女子の優勝はオーストリア。

やはり強かったのは地元オーストリア。当然のごとく、国別1位を獲得。2位には金が2名のスロベニア。3位にフランスが入る。

3位に入ったフランスは女子Jr.決勝でセミファイの下位選手が金を取ったのだが、彼女のあとに出てくるセミファイの上位選手が下で落ちる都度喜びを表現し、最後の選手オーストリアのヨハンナが、下で落ちたその時には、抱き合っけて踊りながら喜ぶフランスコーチ・スタッフ陣が非常に印象的であった。(嫌な感じを受けたわけではないので誤解しないでください)

正式な発表はされなかったが日本は4位なのではないだろうか。

大会中の各国関係者との交流の中からそれぞれの強化事情も垣間見えた。驚かされたのだが、アジアでは、中国はチーム規模6名ながら大会の1ヶ月以上前からヨーロッパに滞在し、開催地イムストを含む各地でトレーニングを積んでいたという。タイも長期の事前合宿を組んで、直前のEYSのIMST大会にも参加していたという。羨ましい限りである。

一方、強豪国では、フランスの方針転換が目立っ



女子ユースAの表彰

ていた。過去2大会、日本の1.5倍から2倍規模のチームで臨んでいた彼らだが、今回は11名と一気にチームの規模を縮小。聞けば決勝に残れる可能性がない者は原則外してきたという。一方スタッフは日本の約1.5倍の6名！ その効果は、やはりてき面でフランスの決勝は7名！（日本は16名中4名）その進出率は6割を超えその目論見通りだったと言えるだろう。

また女子だけが強いというイメージのあったスロベニアが男子で金2つを獲得したのにも驚かされた。スロベニアではここ1年で、ドイツ、フランス、オーストリアなどを招いての交流合宿をしてきたのだという。(記・小日向徹)

日本選手の成績

男子 ユースB	女子 ユースB
2位 島谷尚季	11位 竹内彩佳
3位 是永敬一郎	25位 小武芽衣
6位 蔭谷康平	26位 善村 萌
9位 飯田 譲	女子 ユースA
男子 ユースA	2位 小田 桃花
9位 村井隆一	11位 尾上 彩
19位 竹田陸人	18位 安田あとり
男子 ジュニア	23位 飯田あづみ
14位 新田龍海	
15位 羽鎌田直人	
16位 樋口純裕	

【各国のメダル獲得数】

- 1位 オーストリア (金3、銀1)
- 2位 スロベニア (金2)
- 3位 フランス (金1、銅1)
- 4位 日本 (銀2、銅1)
- 5位 イギリス・ロシア・ウクライナ (銀1)
- 6位 アメリカ、イタリア、ノルウェイ、ベルギー (銅1)

【スタッフ】

コーチ：木村伸介、安井博志、西谷善子
 チームマネージャー：小日向徹
 視 察：目次俊雄



男子ユースBの表彰

第2回山岳指導員（スポーツクライミング）養成講習会（千葉）

日時：平成23年8月18日～21日（4日間）

場所：千葉県印西市松山下総合体育館

受講者：19名

講師（兼検定員）：永井豊、目次俊雄、有枝樹雄、佐藤豊、飯田ゆか、阿部雅史、大井將生、井納吉一、下越田功、神尾重則、西嶋久貴、羽鎌田裕子、田中星司、篠崎喜信、中村正、滝内壽一、目次容子、藤江理枝（講師：18名、検定員：15名）

現在、日本山岳協会の中には、大きく分けて5つの活動領域が存在する。登山活動、登攀活動を中心としたアルパイン、競技を中心としたスポーツクライミング（以下「SC」と記す）、アイスクライミング、山岳スキー、トレイルラン（自然保護や共済等は分類の視点を異にしてということをお断りしておきます）。とりわけ近年、SCの競技者、愛好家の人数は大きく増加している。彼らに正しい指導をするため、また競技者の育成のために、SCの指導員制度の必要性が急務であった。また、平成25年の東京国体から監督には指導員資格が必要となったことなど、その緊急性は高まった。それらを受け、昨年、一昨年はSC上級指導員の育成、そして今年からSC指導員の育成が始まった。

千葉のSC指導員養成講習会には、国体監督の予定者、競技者の指導者、クライミングジムの経営者等様々な受講生19名が指導者としての資格の必要性、あるいは勉強を兼ねて受講した。

◆1日目（8月18日）

C級審判の資格所有者はこの日は免除日となり、12名の受講生で講習が始まった。まずは、目次講師による競技理論。映像を多く使い、リード競技、ボルダリング競技の特性、競技者、指導者、審判員としての視点等詳しく説明された。また、国体競技の特殊性等も映像を駆使し講義された。続いて飯田講師によるクライミング技術、安全対策についての理論講義。クライミング用具、ロープの説明から始まり、それらの使い方、ロープの結び方、そして注意点等が詳しく説明された。また、トップロープクライミング、リードクライミング、ボルダリングにおける技術および、それらの危険性と回避の方法が講義された。そして最後にスポット技術について詳しく説明され、講義を締めくくった。1日目最後の講義は井納講師によるスポーツクライミングの歴史、クライミング競技の歴史についてである。フリークライミングの起源から始まり、世界のフリークラ

イミングの歴史と対比させながら、日本のフリークライミングの歴史を語った。またスポーツクライミング競技会の歴史として、ソ連コーカサスの日・ソクライミング大会から現在に至る国際大会、国内大会と国体競技を対比させながら講義された。

◆2日目（8月19日）

この日、受講生が全員揃い、初めに開講式が行われた。千葉県山岳連盟宇野仁章会長および日本山岳協会指導委員会永井委員長による挨拶があった。その後、講義が開始された。最初は下越田講師による法律理論をDVDにて視聴。最近の事故例とその原因。そして、それらも含めての事故時の指導者の立場と法的責任が説明された。次に、道具やルートを選択等多岐に渡りクライミングの危険と安全性についての説明があった。次に主催者としての理念について語り、最後はリーダー（主催者）に係わる主な諸法令を説明し講義を締めくくった。次は神尾講師による医学についての基礎理論をこれもDVDにより視聴した。まずスポーツ損傷についての説明があり、それらを回避するトレーニングの方法について、さらには効果的なトレーニング理論についての説明があった。次にムーブやフォールなどクライミングによる損傷の説明があり、さらにはジュニア・クライマーへの注意事項が説明された。さらにパンプを避けるトレーニング方法についての説明、最後はドーピングについての注意点が説明され午前の講義が終了した。午後は指導法検定から始まった。まず、永井講師により、「指導法について」と、「クライミング指導者になるための注意点について」の講習があった。その後、講習生は3班に分かれ、一つの班は与えられた「リードクライミングの注意点」、「ビレイデバイス」等いくつかの課題の中から一つを選



SC指導員養成講習会参加者

び机上の模擬講義を行った。もう1班は登り方の説明を実際のウォールで実技を交え説明した。最後の1班は確保の仕方について、これも実技を交えての説明。いずれも他の受講生を初心者に見立てての説明である。班を入れ替えて、各班、各自が3種類の説明を終えた。次は阿部講師によるグレードについての理論の講義があった。グレードはなぜ必要かを受講生に考えさせ、グレード設定の共有についての説明があった。また、初級者、中級者、上級者の文字通り壁となるグレードについての説明があり、さらには、ルート、ボルダのグレード表記について、国内と外国との対比の説明がされた。次の講義は大井講師によるルート、課題のセッティングについてである。高校の教員でもある大井講師は自校の生徒の指導の実際と絡めて標題の目的やチェックポイントを興味深く説明した。2日目最後の講義は永井講師による確保論である。ロープ、スリング、カラビナ等の種類や寿命、強度の説明があり、そして落下係数と衝撃力について計算式を示して説明した。墜落時の衝撃荷重等大変参考になる説明がなされた。

◆3日目（8月20日）

最初は永井講師により、指導員制度についての説明があった。その後はすべて検定を兼ねた実習である。まず初めは4班に分かれてクライミング実技と確保である。5.10台のルートをリードで登り、それを他の班の受講生が確保する。一方ではやはりこれも5.10台のトップロープのルートを登り、やはり他の班の受講生が確保する。グループを入れ替えてすべての受講生が一通りの検定を終えた。トップロープでは、初心者に登り方の説明をしながら登るといったものであった。次の実習、検定は課題のセッティングである。各自がそれぞれ課題解決のためのルートをボルダで作成する。例えば、乗り込み、カウンターといった課題解決のボルダを、対象者を各自で設定し、級も示して作成した。その後、他の受講生が実際に登り、評価し合った。評価ボルダのノルマは最低8ボルダ。壁は体育館の中にあるのだが、この日は、外気温が割と低かったため、節電の関係でエアコンが入らなかった。しかしながら、湿度も高く受講生は大汗をかきながらアテンプトし、限界までボルダ評価をしていた。

◆4日目（8月21日）

いよいよ最終日である。最初に有枝講師により、国体競技の監督としての心構え、注意点、指導法が説明された。その後、競技の実技実習が行われ、リードとボルダリングの模擬コンペを選手と審判に分かれて体験した。すべての、講義、実習、検定を終え、

閉講式が行われ、永井委員長の挨拶と、講師を代表して目次講師の講評があった。

さて、これで千葉での講習会は無事終了した。ただ、受講生は理論検定を後日受けなければならない。是非とも、あともう一頑張りしてもらいたい。

最後になりましたが、神戸での講習会の資料等大変参考にさせていただきました。ありがとうございました。関係者の方々にお礼申し上げます。

（記・滝内 壽一）

無雪期レスキュー講習会（西部地区） を登山研で実施

平成23年度無雪期レスキュー講習会が9月23日（金）～25日（日）富山県の国立登山研修所で行われた。totoの助成を受け、縦走・ハイキング、セルフレスキューA、セルフレスキューB、ワークレスキューの4コース40名の受講者で行われた。半数は若い受講者で、女性も多く、漫画や映画の影響もあり初めて高校生の参加があった。そのためとても元気な講習会となり、レスキュー技術の習得・研鑽に取り組んだ。

縦走・ハイキングコースは、主任講師を瀬藤常任委員が務め、受講者は20名であった。セルフレスキュー概論の講義の後、補助ロープの活用方法の実技、模擬登山道での活用練習、搬送法や救急法の実技として止血、捻挫の処置などの応急手当を行い、最終日は負傷者の応急手当と搬送を行う事故発生のシミュレーションを行った。

セルフレスキューは、渡邊常任委員と石田常任委員が主任講師を務め、受講者は13名であった。受講生にレベル差があり、2つに分けて講習が行われた。アンカーの作り方や基本的なノット、流動分散、懸垂下降時のワンターンによる制動の実態、自己脱出、自己吊り上げ、リードビレイからの自己脱出、介助懸垂、背負い振り分け搬送などを行った。



セルフレスキューの講習

ワークレスキューは町田常任委員が主任講師を務め、受講者は7名であった。年々消防の方の参加が増え、基本技術のおさらいの後、フィックスロープの通過方法、ローダウン、ライジングだけでなく実態に即したななめ下へのローダウンなどレベルの高いレスキュー技術を研修した。講師13名とあわせて53名での研修は食事や懇親会の準備、後片付けも大変であるが、受講者の協力も得て大変スムーズに行えた。若手の男女の参加があり、受講者が積極的に実技に取り組むなど講習としても充実したものとなった。

次の積雪期レスキュー講習会（東部地区）は来年1月27日（金）～29日（日）に、谷川岳の土合山の家で行われますので奮ってご参加ください。内容は①クラス1（雪質観察、ビーコン基本操作、雪崩の予防、シェルター、低体温症）、②クラス2（事故発生から搬出までのレスキュー技術、低体温症）で、クラス2はロープワークを含む基礎技術習得済みの方を対象とします。

（遭難対策委員長 西内 博）

平成23年度臨時理事会報告

- 日時：平成23年8月28日(日)
10時30分～14時50分
- 場所：岸記念体育会館・102～103会議室
(東京都渋谷区神南1-1-1)
- 会議の成立状況（定款第26条）

定数	32名（定足数22名）
出席者	27名
欠席	5名
計	32名

4 出席者

神崎忠男会長（特別）、内藤順造副会長（山梨）、國松嘉仲副会長（特別）、八木原暁明副会長（特別）、服部一雄（青森）、尾形一幸（福島）、仙石富英（栃木）、西内博（茨城）、佐藤光由（群馬）、石倉昭一（埼玉）、高山雅夫（千葉）、水島彰治（神奈川）、宮本義彦（長野）、高田和彦（石川）、安藤武典（愛知）、堀井啓介（岐阜）、伊藤克己（滋賀）、遠山誠之介（和歌山）、蓬郷隆治（岡山）、京才昭（広島）、田福正治（徳島）、田場典淳（沖縄）、尾形好雄（特別）、相良忠麿（特別）、谷口浩平（特別）、寺内丈行（特別）、永井豊（特別）、各理事 以上27名

〔委任者〕松元邦夫副会長（東京）、小野倫夫（北海道）、足達敏則（福岡）、堀井昌子（特別）、北山真（特別）各理事 以上5名

〔同席者〕監事：福田昇、岡本忠良

5 神崎会長挨拶

会長に就任して3ヶ月が経った。昨日は泊り込みで常務理事の研修会を行い、常務理事から洗礼を受け「しっかりやれ」と励まされた。新公益法人に向っては、理事が中心となって新しい日山協を作っていかなければならない。本日の議案は、新公益法人の定款についてである。定款を変更するということは、難しいことであるが、今回は行政から定款を変更して新しい組織を作って出発しろ、というのであるから良いチャンスである。この機会を是非、充実させ、新しい日山協作りをしていきたい。そのためにも本日は、定款についてご審議していただきたい、と挨拶。

6 議事役員の選出

定款第25条の規定により神崎会長を議長に選出

7 議事録署名人の選出

定款第30条の規定により服部一雄（青森）理事及び水島彰治（神奈川）理事を指名

8 議事

(1)第1号議案 公益社団法人の新定款（案）等について

はじめに國松副会長より国が何故、この公益法人改革をしなければならなくなったのか、新しい公益法人の定款とこれまでの定款の違うところ、の2点について概要を説明。

続いて、尾形専務理事から公益社団法人日本山岳協会の新定款（案）及び定款に係る会員規程、加盟団体規程、役員選考規程（案）等について逐条説明があり、審議に入った。

尾形（一）：加盟団体規程第7条の「理事長会議の招集とあるのは、現行の評議員会の代替と考えてよいのか、それと役員選考規程第3条のブロック代表理事の数だが、四国4県で1名なのは何故か。尾形：理事長会議の件は、その通りである。ブロック代表理事の数については、現行通りとした。この理事数の見直しについては、役員の定数の中で検討していただきたい。

服部：役員選考規程第3条第1項第2号の条文を「ブロック内で協議して」のような弾力的な条文にならないか。

尾形：そのような条文に訂正したい。

宮本：新定款では事業計画及び収支予算は、理事会の承認だけになっているが、総会の承認を受けなくてもよいのか。

西内：これまでは総会出席の正会員理事も責任を負っていたので、予算も決算も総会で承認していたが、新公益法人では、理事が責任を負うのであって、正会員は責任を負わないのだから理事会の承認だけで構わないのではないのか。

京オ：新公益法人ではそれだけ理事に権限と責任が与えられているのだから、理事会の承認だけで良いと思う。それから先程の説明で現行の常務理事が18名と云うのは多過ぎる。広島県体協は7名だ。その分責任は大変重い。

尾形：定款第4条の「山岳スポーツ」の文言についてご審議願いたい。

京オ：岳連はあらゆるジャンルの事業を行っているので、「スポーツライミング」と特化しないで、曖昧模糊とした文言にして貰いたい。いろいろ考えてみても「山岳スポーツ」に代わる文言がみつからない。

伊藤：一般の人には「山岳スポーツ」では、判りにくい。「山岳競技」の方が判り易いのではないか。

内藤：事業として判り易くするために「山岳スポーツ」という文言を入れた。若し、判りにくいと云う事であれば4条第2項に「山岳スポーツ」とは、こう云うものを指す、と付記してはどうか。

國松：このような煩わしい問題は、他の競技団体にはない。何でも入れてしまえるような文言では、本来入れてはならないようなものまで入る可能性がある。登山と「スポーツライミング」のような特化できる文言が望ましい。

安藤：岳連ではトレイルランニングも含めているんな事業をしているので、「スポーツライミング」と特化しないで貰いたい。それから競技については、ボルダーを楽しむ、フリーを楽しむといった競技ではない楽しみ方もあるので、競技というのも如何なものか。「山岳スポーツ」が判らないと云うのであれば、この造語を広めていけば良い。

安藤：加盟団体規程第11条の加盟手続きは、既加盟団体の現状にそぐわない。

尾形：これは新たに加盟する団体の手続きである。紛らわしいので条文に「新たに」を加筆したい。

伊藤：定款第21条第3項で役員の日年制を設けることができる、とあるが、これはどの細則に規定してあるのか。

尾形：定めるのであれば、定款施行細則で規定したい。

伊藤：定款第28条の参与は、現行の個人賛助会員の参与と同じか。同じであれば条文の若干名はおかしくないか。

尾形：同じ位置づけである。若干名は削除する。

京オ：定款第28条の最高顧問と云う任意の機関は、認められるのか。

尾形：確かに名誉会長がいて、さらに最高顧問と云うのは機関的に苦しいが、現状に合わせる形で設けた。

京オ：そうであれば新定款の作成にあたっては、最高顧問を無くしてはどうか。

西内：加盟団体規程第4条第3項の名称の件だが、既に県名を冠した県庁山岳部や高体連が存在するのはどう対応するのか。

尾形：そこまで考えていなかったので検討する。

八木原：定款第22条第4項の条文の文言がおかしいか。

尾形：確におかしい。条文を整理したい。

伊藤：会員規程第5条で正会員の会費が1万円と規定されて、加盟団体規程第10条では加盟団体の分担金が規定されている。これでいくと岳連の基礎額は6万円となる。

尾形：会費についてはどちらの規程もあくまでもたたき台として提示した。会費については検討委員会を設けてじっくり検討していきたい。

國松：会員規程、加盟団体規程、役員選考規程については、条文としておかしいところがあるので、文言整理をして、改めてご提示したい。

◎第1号議案については、定款等の一部文言を整理・削除することを条件に承認。

(2)報告

①U A A A 理事会報告（八木原副会長より資料に基づいて報告があった。）

②賛助会員（参与）推薦の促進について（尾形専務理事より資料に基づいて依頼があった。）

③公認主任検定員認定規約の一部改訂について（永井常務理事から資料に基づき報告があった。）

④ルートセッター全国研修会報告（高山常務理事から12名のC級ルートセッター合格者の報告があった。）

⑤国体第2期実施競技選定に係る競技団体基礎調査について（高山常務理事から報告があった。）

⑥長野県山岳連盟の問題について（宮本理事から一連の経過について報告があった。）

9 閉会

神崎会長より、今、登山の多様化を受けて登山界は、過渡期を迎えている。こう云う時こそ日山協が登山界のリーダーシップを取り、登山界を牽引していく意気込みで新しい組織作りをしていきたい。それには任せる環境作りをし、自信と誇りをもって格式高いモラルやマナーを実践して社会に信頼され、期待される日山協を目指していくので、協力をお願いしたい、と挨拶され、議事を終了した。

【東日本大震災義援募金協力者ご芳名】

(10月13日現在、敬称略)

3,132,010円：東京都山岳連盟、100,000円：石川県山岳協会、16,240円：埼玉県山岳連盟（2度目）、10,000円：福岡県山岳連盟、23,000円：香川県山岳連盟

(総額：6,681,980円)

※義援募金の受付は終了させて頂きました。

第35回 Mountain World

女性初の8000m×14座無酸素登頂

池田常道

去る8月23日、オーストリアの女流クライマー、ゲアリンデ・カルテンブルーナーが北稜からK2(8611m)頂上に立ち、8000m峰14座完登を成し遂げた。女性としては昨年5月のエドウルネ・パサバン(スペイン)に次ぐ2人目に当たるが、全山無酸素で登ったのは彼女が初めてである。ちなみに、昨年4月に女性初の14座登頂と報道された韓国の呉銀善は(2010年9月号でお伝えしたように)09年のカンチェンジュンガ登頂疑惑を払拭できず、ペンディングされている。

1998年のチョー・オユーに始まったカルテンブルーナーの8000m峰オデッセイだが、彼女にとってK2は執念の山だった。2007年から3回にわたってパキスタンのバルト口側から登頂を試みたものの、すべて南東稜の肩ないしポトルネックで敗退していたからだ。少人数・無酸素を旨とする彼女にとって、エヴェレスト以下K2、カンチェンジュンガ、ローツェの四大峰は、大きな障壁として立ちふさがり、一発で落とすことはできなかった。

とくに、4度目となる今回のK2は中国・新疆側に活路を求め、夫であるドイツ人ラルフ・ドゥイモフィッツ(09年に18人目の14座完登を達成していた)と共に、カザフスタンのマクスト・ジュマイエフ、ヴァシリー・ピフツォフといった強力メンバーと力を合わせて北稜日本ルート(1982年に日山協隊が無酸素で初登攀したルート)に挑んだ。バルト口側は近年条件が悪く、08年に頂上ピラミッドで11人の大量遭難を出していた一方、新疆側は比較的安全なリッジ通しのルートであるうえ、カザフ勢が07年に頂上直下8600mまで迫った経験があった。また、ジュマイエフとピフツォフはカルテンブルーナー同様14座まであと1座を残し、何度もK2に敗退していた因縁があった。

一行は8月第1週までにC4(7800m)に到達したが天候が悪化して頂上攻撃に至らず、いったんBCまで退却して機会を待った。バルト口側の各隊もこの間に断念、下山した。ところが8月17日、天候は奇跡的に回復し、最後の頂上攻撃をかけ

るチャンスが訪れた。しかし雪崩の危険性は依然として高く、ドゥイモフィッツともう1人は断念、カルテンブルーナーとカザフの2人、ポーランドのダレク・ザルスキが続行した。4人は21日C4に達し、翌日8300m地点までルート工作してビバーク。この区間は北稜から頂上雪田に移るトラバース区間にあたる。翌日午前1時に出発するが寒気があまりにも厳しいため、いったん戻って7時半まで待機してから登高を再開した。8400m地点通過は11時15分、頂上稜線には午後4時半、そして6時18分、ついに4人そろって頂上に立った。カルテンブルーナーとザルスキはそのままC4まで戻り、8300mでビバークしたカザフの2人も追いついて、25日には全員無事BCに帰着した。

カルテンブルーナーの14座完登にはドゥイモフィッツをはじめ日本の竹内洋岳や今回のカザフ・ペアなど、行動を共にした多くの男性クライマーの協力があったことも忘れるべきではない。また、一時期なりふり構わぬ泥仕合の様相を呈した、女性初を争う14座レースもこれを以てニュースとしての役割を終えたというべきだろう。

■カルテンブルーナーの8000m峰登山

(○囲み数字が登頂成功)

1994年	ブロード・ピーク前衛峰登頂
1998年	① チョー・オユー登頂
2000年	シシャパンマ中央峰登頂
2001年	② マカルー登頂
2002年	③ マナスル登頂
2003年	カンチェンジュンガ7200mまで
	④ ナンガ・パルバット登頂
2004年	⑤ アンナプルナI峰登頂
	⑥ ガッシャブルムI峰登頂
2005年	⑦ シシャパンマ主峰登頂
	エヴェレスト北面断念
2005年	⑧ ガッシャブルムII峰登頂
2006年	⑨ カンチェンジュンガ登頂
	ローツェ8400mまで
2007年	ダウラギリI峰7400mまで
	⑩ ブロード・ピーク主峰登頂
	K2の8100mまで
2008年	⑪ ダウラギリI峰登頂
2009年	⑫ ローツェ登頂
	K2の8300mまで
2010年	⑬ エヴェレスト登頂
	K2の8300mまで
2011年	⑭ K2北稜から登頂、14座完登

JMA

守ります。美しい日本の山。

あなたの保険は、 安心して登山ができる保険ですか。

救助費用はタダではありません。

■平成21年山岳遭難の概況

(警察庁生活安全局地域課 平成22年6月8日)

発生件数 **1,676** 件

遭難者数 **2,085** 人

死者・行方不明者 **317** 人

詳しくは → www.jma-sangaku.org

お問い合わせは

日本山岳協会 山岳共済会

事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター
月～金 10:00～17:00 (土・日・祝日除く)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL: 03-5958-3396 FAX: 03-5958-3397

E-mail: sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp



日時 平成23年8月27日(土)
10:30~14:20
場所 東京都多摩市
多摩アカデミーヒルズ
出席者 神崎会長
内藤副会長、國松副会長、八木
原副会長、尾形専務理事、西
内、仙石、佐藤、石倉、水島、
相良、谷口、永井各常務理
委任 松元副会長、北山、寺
内、堀井常務理事

1.専門委員会動静

8月常務理事会以降
(8月4日~8月26日)

[報告]

(1)国際委員会

8月9日(火) 出席者9名
ア カラコルムの日本隊に関する
カナダでの報道について
イ 2012年日パ国交60周年記念
イベントについて

(2)競技委員会

8月25日(木) 出席者9名
ア 8月常務理事会報告
イ 全国高体連登山大会報告
ウ 全国高体連委員長会議報告
エ 国体における実施競技選定
(第2期)について
・平成31年~34年までの実施競
技を平成24年中に公表予定
・平成23年度中に中央競技団体
及び都道府県体協の調査が行わ
れる予定

オ ルートセッター全国研修会報告
カ JOCジュニアオリンピック
カップ報告及び来年度の日程に

ついて
・南砺市から24年度は、土日月
の3日間をお願いしたい、と打
診された。
・8/11~13で検討(24年度の高
校総体は、新潟で8/7~11)
キ 第2回全国高等学校選抜クラ
イミング選手権大会について
・第3回実行委員会:9/4(日)10
時~14時、加須市民体育館
ク 第7回山岳スキー競技日本選
手権大会について
ケ 2012WC印西大会の進捗状
況について
・日程が流動的
コ 国体選手参加資格の確認作業
について
サ 2011年国体ブロック大会通
過都道府県について
シ 国体後催祭の準備状況について
・福井県(平成30年):福井に
内定
ス ボルダリング・ジャパンカ
ップについて
・2/25(土)~26(日)、長崎県・茂木
セ 日体協国体アンケート調査の
検討
ソ 平成24年度からの審判員、
ルートセッター、競技運営員の
登録・更新業務について
タ その他
・愛媛県選手のタトゥ問題について

2.その他の重要事項

(8月4日~8月26日)

[報告]

(1)顧問懇談会 8月4日(木)

於:岸記念体育会館
齊藤、坂口、山本、高室、瀧
島、城、粟飯原、本木各顧問、
神崎会長、内藤、國松、松元副
会長、尾形専務理事
(2)UIAA元会長Alan Blackshaw
氏 逝去、享年78歳。
8月4日(木)
(3)神崎忠男君を励ます会
8月5日(金) 於:プラザエフ
神崎会長、内藤、松元副会長ほか
(4)日本山岳サーチ・アンド・レス
キュー研究機構総会 8月7日
(日) 於:神戸市登山研修所
内藤副会長、西内常務理事
(5)平成23年度全国高体連登山大
会 8月9日(火)~13日(土)
於:岩木山総合公園体育館・北
八甲田山系
神崎会長、高山常務理事
(6)ジュニア登山教室 in 立山
8月10日(水)~13日(土)
於:国立立山青少年自然の家、
立山周辺
神崎会長、本木顧問、内藤副会
長、西内、仙石常務理事
(7)ルートセッター全国研修会
8月10日(水)~12日(金)
於:南砺市桜ヶ池C
神崎会長、寺内常務理事
(8)第14回JOCジュニアオリン
ピックカップ
8月14日(日)~16日(火)
於:南砺市桜ヶ池C
神崎会長、高山、北山、寺内常
務理事
(9)SC指導者養成講習会
8月18日(木)~21日(日)
於:千葉県印西市
永井常務理事ほか
(参加者19名)
(10)第66回国体近畿ブロック大会

寄贈図書

●寄贈本●

山と溪谷社『梅棹忠夫 未知への
限らない情熱』藍野裕之著
大川学園大川吉宗
『大台ヶ原知られざる謎』

●雑誌●

東京新聞社『岳人』No.772 10月号

山と溪谷社『ROCK & SNOW』053
山と溪谷社『山と溪谷』No.918

●会報●

兵庫県山岳連盟
(財)健康・体力づくり事業財団
中華民国山岳協会
日本万歩クラブ
日本スポーツ振興センター
山のECHO
横浜山岳会

全日本ボウリング協会
明治大学山岳部研究会
日本ゲートボール連合
岡山県山岳連盟
日本武術太極拳連盟
国立公園協会
日本体育協会スポーツ少年団
日本ヒマラヤ協会
高校生新聞社
長野県山岳協会
日本体育協会

福岡山の会
日本勤労者山岳連盟
神奈川県山岳連盟
常北山会水会山岳部
雪標山岳会
日本山岳会
東京野歩路会
岩手県山岳協会参与会
日本山岳写真家協会
日本体育協会

8月20日(土)~21日(日)

於：神戸市登山研修所

國松副会長

(11) 中華民国山岳協会何中達理事長

ら訪問団歓迎会 8月23日(火)

於：南国酒家

神崎会長、尾形専務理事、笹生

常任委員

(12) 2012年日パ国交60周年記念事

業打合せ 8月24日(水)

於：岸記念体育会館

ジャン・アラム・アフリディ報

道参事官、尾形専務理事

3. 議 事

(1) 平成23年度8月常務理事会議

事録の承認について(承認)

(2) 国体第2期実施競技選定に係る

競技団体基礎調査について(アンケートの最終回答を競技委員会に付託することで承認)

(3) 公益社団法人の新定款(案)について(一部訂正で承認)

(4) 平成24年度自然公園指導員候補者について(承認)

(5) 平成23年度雪崩災害防止功勞者の候補者推薦について(飯田肇氏の候補者推薦を承認)

(6) 日中韓国際交流事業について(提案の日程・場所で承認)

(7) 公認主任検定員認定規約の一部改訂について(提案通り承認)

(8) ルートセッター全国研修会・C級ルートセッターの認定について(提案通り承認)

(9) 第7回山岳スキー選手権大会の開催計画について(承認)

(10) 報告事項

ア スポーツ基本法等の施行について

イ 自動対外式除細動器(AED)の携行等について

ウ 熱中症事故の防止について

エ 山岳共済会の報告

オ 2012年日パ国交60周年記念事業について

カ 高体連登山専門部常任委員会報告

キ 平成23年度専門委員会常任委員候補者について

ク 公益法人における会計基準に

ついて

ケ 23年度公認スポーツ指導者講師競技別全国研修会(講師研修会)開催について

コ 23年度登攀技術に関する指導員の教育と研修及び主任検定員養成講習会の実施について

4. 役員等の派遣について

(1) 内閣府公益認定等委員会窓口相談 9月2日(金)

於：虎ノ門37森ビル

尾形専務理事、小野寺事務局員

(2) 平成23年度和歌山県ゴールデンキッズ発掘プロジェクト

「ゴールデンキッズトライアルに係るワークショップ」及び「ゴールデンキッズトライアル」

9月4日(日) 於：和歌山県・ホテルグランヴィア和歌山西谷常任委員

(3) 第7回JOCスポーツと環境・地域セミナー 9月16日(金)

於：神戸市勤労会館大ホール(地元岳連に打診)

(4) 神奈川大学クライミングウォールお披露目会 9月24日(土)

於：神奈川大学横浜キャンパス神崎会長

(5) 平成23年度中高年安全登山指導者講習会(東部地区)

9月16日(金)~18日(日)

於：秋田県鳥海山山麓

神崎会長、仙石常務理事

(6) U I A A 総会

10月5日(水)~8日(土)

於：ネパール・カトマンズ

田中顧問、神崎会長、小野寺事務局員

(7) U A A A 総会 10月9日(日)

於：ネパール・カトマンズ

田中顧問、神崎会長、小野寺事務局員

(8) 長谷川恒男20年祭と石碑除幕式 10月10日(祝) 於：長尾平

(武蔵御岳神社) 石碑前

永井常務理事

(9) 指導員の教育と研修及び主任検定員養成講習会 10月15日(土)~16日(日) 於：宮城県第二総合運動場クライミングウォール

永井常務理事

5. 後援、協賛等の依頼について

ア 第26回かながわ県民登山(ハイク)の後援名義について(承認)

6. 報 告

(1) 自然保護指導員の承認

なし

(2) 指導員の認定承認

① 上級指導員

なし

② 指導員

なし

③ S C 主任検定員

なし

7. 通知、依頼、連絡、案内等

別紙の通り

8. 連絡事項

① 平成23年10月常務理事会

10月13日(水) 17:30

(岸記念体育会館103号室)

9. その他

定例常務理事会の終了後、常務理事研修会を開催(14時50分~19時15分)。

編集後記

この度、田中文男顧問の発案と各岳連(協会)の協力で、9月22日郵便事業会社から「日本の山岳切手」シリーズ第1弾が発行されました。(詳細は日山協H・Pを参照願います。)

この機会に、切手の題材に推薦した「お国自慢の山」をテーマに、加盟団体の情報を掲載したいと思いますので原稿の協力をお願いします。(広担当報 水島彰治)

登山月報 第511号

定 価 100円(送料別)

予約年間 1,200円送料共

昭和45年12月12日

第三種郵便物認可

(毎月1回15日発行)

発行日 平成23年10月15日

発行者 東京都渋谷区神南1の1の1

岸記念体育会館内

社団法人日本山岳協会

電 話 03-3481-2396

F A X 03-3481-2395